様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20530563
研究課題名（和文）　高関係流動性社会における適応デバイスとしての自尊心

研究課題名（英文）　Self-Esteem Is an Adaptive Device in Societies High in Relational Mobility

研究代表者
結城　雅樹（YUKI MASAKI）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50301859

研究成果の概要（和文）：公開データの 2 次分析、質問紙調査、準実験、実験室実験など 7 つのマルチ＝メソッド研究を通じて、自尊心の社会的機能に関する検討を行った。その結果、1) 自尊心が幸福感に与える影響は、対人関係の選択肢が多い高関係流動性状況において強くなること、2) 自尊心は、高関係流動性状況において適応的な、新規他者との関係形成を後押しするブースター機能を持つこと、3) 自尊心は、高関係流動性状況において孤独感が幸福感を低下させる過程を媒介すること、が示された。

研究成果の概要（英文）：Seven multi-method studies, such as a secondary analysis of public domain data, questionnaire survey, quasi-experiment, and laboratory experiment, examined social functions of self-esteem. Results indicate that 1) the effect of self-esteem on happiness is stronger in social contexts high, rather than low, in relational mobility, where there is a greater amount of choices in interpersonal relationships, 2) self-esteem has an “interpersonal booster-function” (i.e. motivating individuals to approach strangers), which is adaptive in social contexts high in relational mobility, and 3) self-esteem mediates the process in which feeling of loneliness decreases happiness, particularly in social contexts high in relational mobility.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会心理学・文化心理学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：自尊心、幸福感、孤独感、関係流動性、社会生態学的アプローチ、文化差、文化心理学、マルチ＝メソッド

１．研究開始当初の背景

1990 年代以降、社会心理学における比較文化研究が飛躍的な発展を遂げ、自己過程、対人関係過程、そして集団過程にわたる様々な社会心理過程の文化差の存在が明らかにされてきた（例えば、Markus & Kitayama, 1991; 山本・原, 2006; Yuki, 2003)。中でも大きな注目を集めてきたのが、**自尊心の文化差**である。自尊心とは自己の肯定的評価を指すが (Rosenberg, 1965)、過去に欧米で行われた膨

大な研究を通じて、高い自尊心を持つことが幸福感の源泉となることなど、その重要性が広く示されてきた（Diener & Diener, 1995）。しかし近年の研究では、日本人を含む東アジア人は、北米人と比べて自尊心が低く、また自尊心が幸福感に与える影響も弱いことが見いだされている（Heine et al., 1999; Kwan, Bond, & Singelis, 1997; Uchida, Kitayama, Mesquita, Reyes, & Moring, 2008）。**では、この文化差はいったい何に起因するのだろうか。**

この問いに対し、従来最も多く用いられてきた説明原理は、**文化的自己観**（Markus & Kitayama, 1991）の差異である。北米では相互独立的自己観が優勢であり、個人の自律性や独自性が重要である。したがって、人々はその感覚を支える自尊心を高めるように動機付けられる。一方、東アジアでは相互協調的自己観が優勢であり、独立した個人としての自己評価である自尊心よりも、他者との関係性の良し悪しが重視される（Heine et al., 1999）。だがこの説明の問題は、「自律への志向性が、自律を支える自己概念を生み出す」というように、**説明が循環的**な点である。

これに対し本研究では、**文化差への適応論的アプローチ**（山岸, 1998）からの別解釈を試みる。適応論的アプローチとは、個人の心理メカニズムを自然環境、および社会環境への適応の道具として捉える立場である（亀田・村田 2000）。山岸 (1998) はこれを、日米間の一般的信頼、および集団主義の文化差の説明に適用した。そこでは、日米社会間の社会関係や社会制度といった社会生態学的環境の差異が俎上に上げられ、一般的信頼や集団主義的行動が、それぞれの社会の環境特性に対する適応戦略として捉えられる。この考えに基づき、本研究もまた、**自尊心の文化差を、異なる社会生態学的環境の帰結、またはその環境下での適応戦略の違いとして捉える**。以下、当該理論、および本研究の検討課題を詳述する。

２．研究の目的

本仮説で着目する社会生態学的環境変数は、**関係流動性(relational mobility)**である。関係流動性とは、**ある社会、または社会状況に存在する、対人関係の選択肢の多寡**を指す（Yuki, et al., 2007）。近年の研究において、特に北米社会は、他の社会と比べて関係流動性が高いことが指摘されている(e.g., Adams, 2005; 山岸, 1998)。北米のような高関係流動性社会では、自由に対人関係を選択できるので、人々が絶えず、より望ましい相手との関係作りや、より望ましい集団への所属を求めている。こうした関係作りの機会の多い社会状況は、一見すると誰にとっても望ましい状況であるように見える。だがそこには、機会が多いが故の困難さもある。それは、**こうした社会で望ましい対人関係を結ぶためには、自分もまた望ましい相手から選択されなければならない**ことである。そのためには、多くの他者と比較して、自己が社会的価値の高い魅力的な属性を持っていることが必要である。逆に、多くの他者と比べて魅力的な属性を持っていない者は、魅力的な他者から受け入れてもらえる可能性は低い。

(1) 検討課題 1：自尊心が幸福感に与える影響の検討

このような、いわば「対人関係の自由競争市場」の下では、人々が持つ自尊心に二つの特徴が生じると考えられる。第一に、自尊心の高さが幸福感と強く関連するだろう。Leary & Baumeister (2000)も述べているように、自尊心とは、広い社会の中における自己の一般化された価値を指し示す主観的な指標である。つまり、高自尊心者とは、広い社会における自己の相対的な価値が高いと思っている者のことである。それゆえ彼らは、社会的成功が相対的な社会的価値によって決定される高関係流動性社会において、特に高い幸福感を感じるのである。

一方、日本を始めとした関係流動性の低い社会では、対人関係や集団所属性は安定しており、同じ他者とのつきあいが比較的長期にわたる傾向がある。こうした、いわば「対人関係の系列取引市場」においては、対人関係の組み替えが頻繁に起こらないため、自己の社会的価値の認知としての自尊心は将来的な成功を予期させず、またそれが高かったとしても、対人関係の維持には役立たないどころか、安定的な対人関係の維持を阻害する場合さえある。よって、自尊心と幸福感との関連は弱くなるだろう。

(2) 検討課題 2：自尊心の対人関係拡張機能

第二に、高関係流動性社会においては、人々の自尊心が平均的に高くなるだろう。高関係流動性社会には、見知らぬ他者と出会い、より望ましい対人関係を形成する機会が多い。こうした社会においては、高い自尊心を持つこと、すなわち肯定的な自己像を持つことが適応価を持つだろう。なぜならば、それは、見知らぬ他者に対して関係形成を求めた際に、「望ましい属性を持った自己」は相手から受け入れてもらえるという主観的確率を上昇させるからである。その結果、人々は臆するこ

となく、より望ましい属性を持つ他者との対人関係形成に挑戦できる。一方、関係流動性の低い社会においては、こうした心理デバイスを持つ必要性は低い。つまり高い自尊心は、個人を新しくかつ有益な関係形成行動へ後押ししてくれる、「対人関係拡張へのブースター」として機能するため、高関係流動性社会でこそより重要になると考えられる。

(3) 検討課題 3：孤独感が幸福感の低下をもたらす過程に対する関係流動性の調整効果

以上の理論仮説からの臨床心理学的含意は、人々の精神的健康を左右する要因が、社会状況の性質によって異なる可能性である。具体的には、孤独感が幸福感を低下させる過程が、社会状況の関係流動性によって異なることが予測される。低関係流動性状況に置かれた者は、孤独であること自体が本人の社会関係の欠如を意味するため、孤独感は幸福感を直接減退させるだろう。一方、高関係流動性状況に置かれた者は、孤独が自己の社会的価値の欠如を意味するがゆえに幸福感を減退させる。すなわち、孤独感が自尊心の低下を引き起こすことを通じて幸福感を減退させると予測される。

３．研究の方法

以上の 3 つの課題を検討するために、本研究では、マルチ＝メソッドを用いた検討を行った。

(1) 検討課題 1：自尊心が幸福感に与える影響の検討

高関係流動性状況と低関係流動性状況では自尊心と幸福感の関連が異なるという仮説を検討するため、本研究では、従来の文化心理学研究が主に扱ってきた国際比較のみならず、同一国内での地域間比較、同じ種類の人々が置かれた異なる状況間の比較など、様々な比較軸を用いた検証を行った。それはこの仮説が、関係流動性という社会環境の特性と人々の心理傾向の関係をめぐる一般理論であるため、比較軸を国家間に限定する必要がないからである。

①研究 1-1：代表サンプルを用いた地域間比較

代表性のある全国規模のデータを用いることにより、同一国内の関係流動性の異なる地域間の比較においても、高関係流動性地域の方が低関係流動性地域よりも自尊心と幸福感の関連が強いというパターンが見られるかどうかを検討した。公開データである「情報化社会に関する全国調査 (2004)」（直井, 2004）を 2 次分析した。本調査は層化二段無作為抽出法による日本全国の 20～79 歳の成人を対象としたものであり、有効回答数は 1,286 人であった（有効回答率：64.7%）。分析に用いた質問項目・尺度は、1)自尊心、2)人生満足感、3)現在の対人関係への満足、および 4)現在の職場での勤続年数、であった。

②研究 1-2：準実験法による状況間比較 (1)

新年度開始直後の大学 1 年生と 2 年生を比較する準実験的方法を用いて、仮説の検討を行った。入学直後の 1 年生は、新たな環境で新しい友人を作る必要に迫られた高関係流動性状況にいると考えられる。一方、大学入学後 1 年が経過した 2 年生は、ある程度固定化した友人関係を維持しており、新入生と比べて相対的に関係流動性が低い状況にいると考えられる。

回答者は、北海道大学の 1 年生 344 名、2 年生 190 名であった。調査時期は新年度開始直後の 4 月中旬であった。主な質問尺度は、1)自尊心尺度（Rosenberg, 1965）、2)人生満足感尺度（Diener et al., 1985）、および 3)関係流動性尺度（Yuki et al., 2007）であった。

③研究 1-3：準実験法による状況間比較 (2)

研究 1-2 の限界は、同じ大学 1 年生の中にも、関係流動性に関して分散がある可能性を捉え切れていない点である。そこで、同じ仮説を、大学入学のために遠隔地から引っ越してきたために対人関係を新たに作る必要に迫られた 1 年生と、その必要性が低い地元出身の 1 年生を比較することによって検討した。

回答者は、北海道大学の 1 年生のうち、入学時引越し経験者 110 名、および地元出身者 123 名であった。調査時期は、新年度開始直後の 4 月中旬であった。主な質問尺度は、1)自尊心尺度（Rosenberg, 1965）、2)情緒的サポート尺度（久田ら, 1989）、および 3)人生満足感尺度（Diener & Diener, 1985）、であった。

④研究 1-4：中国における検討

日本人と同じ「東アジア文化」に属す香港に在住の大学生を対象にした検討を行った。まず、Kwan et al.(1997)による先行研究の結果（＝自尊心が幸福感に与える影響は、香港中国人よりもアメリカ人の方が強い）を再現した上で、その差が関係流動性によるものなのかを検討することを目的とした。

回答者は、香港大学の学生 79 名（うち中国籍学生 66 名）であった。主な質問尺度は、1)自尊心尺度（Rosenberg, 1965）、2)情緒的サポート尺度（久田ら, 1989）、3)人生満足感尺度

（Diener & Diener, 1985）であった。

(2) 検討課題 2：自尊心の対人関係拡張機能

自尊心の対人関係ブースター仮説、すなわち高自尊心者は低自尊心者よりも対人関係拡張傾向が強いとの仮説を検討した。

①研究 2-1：相関研究

高自尊心者が低自尊心者に比べて、より強い対人関係拡張傾向を持っているか、日本人大学生を対象として、場面想定法の質問紙を用いて検証した。

回答者は北海道大学生 39 人であった。材料と質問尺度：1. 自尊心尺度（Rosenberg, 1965）、2. 関係形成・維持シナリオ：初対面他者、または友人のいずれとコミュニケーションをとるか、また一緒に行動するかを選択しなければならない状況を描いた 4 つの文章。参加者は、各状況下において初対面他者および友人とのコミュニケーションに割く時間配分（全体を 100%とする）を答えた。また、初対面他者との新規関係形成動機、および友人との既存関係維持動機の強さを回答した。3. 一般的な関係形成志向、および関係維持志向：「新しい友人関係はいくらでも作れる」、「いつも自分の仲の良い友人といたい」などの 22 項目。

②研究 2-2：実験研究

実験的手法によって、自尊心の対人関係ブースター仮説を検討した。参加者の自尊心を人為的に操作し、対人関係拡張に対する動機が変化するかどうかを検討した。

参加者は全て北海道大学の 1 年生であり、自尊心高条件（26 名）、自尊心低条件（30 名）、統制条件（29 名）のいずれかに無作為に割り当てられた。課題は高自尊心条件が「これまでの人生で、最も自分に自信を持った成功経験を 3 つ思い出して書き出す」、低自尊心条件が「これまでの人生で、最も自分に自信を失った失敗経験を 3 つ思い出して書き出す」、統制条件が「三日前に見たテレビ番組を 3 つ思い出して書き出す」というものだった。この操作を受けた後、参加者は、研究 2-1 と同様の関係形成・維持シナリオへの回答、および一般的な関係形成志向、および関係維持志向尺度に回答した。

(3) 検討課題 3：孤独感が幸福感の低下をもたらす過程に対する関係流動性の調整効果

①研究 3-1：準実験的検討

準実験手法を用いて、関係流動性の異なる 1 年生と 2 年生で、孤独感が幸福感に与える影響を自尊心が媒介するかどうかを検討した。具体的な予測は、高関係流動性状況に置かれた 1 年生においては自尊心の強い媒介効果が示されるのに対して、低関係流動性状況に置かれた 2 年生では自尊心の媒介効果は弱いだろう、というものである。調査対象者は北大生 189 名（1 年生 108 名、2 年生 81 名）であった。質問尺度は、1)孤独感尺度、2)自尊心尺度（Rosenberg, 1965）、3)人生満足感尺度（Diener & Diener, 1985）、であった。

４．研究成果

(1) 検討課題 1：自尊心が幸福感に与える影響の検討

①研究 1-1：代表サンプルを用いた地域間比較

日本全国を 11 地域に分割し、それぞれの地域内において、自尊心と人生満足感の関連を算出した。さらに、その関連の強さと、各地域内での勤続年数の平均との関連を検討した（後者を関係流動性の指標と見なした）。その結果、予測通り、平均勤続年数の短い地域（高関係流動性地域）では、それが長い地域（低関係流動性地域）と比べて、自尊心と幸福感の関連が強いことが示された。

②研究 1-2：準実験法による状況間比較(1)

まず研究の前提となる関係流動性の差異を確認したところ、予測通り、関係流動性尺度の得点は、2 年生よりも 1 年生の方が高かった。次に主たる予測を検討するために、人生満足感を従属変数、また自尊心、状況のダミー変数（1 年生＝0, 2 年生＝1）、自尊心×状況の交互作用項を独立変数とする重回帰分析を行った。すると予測された自尊心×状況の交互作用が有意になった。そこで、回答者を学年ごとに分割して分析したところ、やはり予測と一貫して、2 年生よりも 1 年生において、自尊心が人生満足感に与える影響が強いことが示された。

③研究 1-3：準実験法による状況間比較(2)

従属変数を人生満足感とし、独立変数を自尊心、情緒的サポート、状況のダミー変数（引越し＝0、地元＝1）、自尊心×状況、および情緒的サポート×状況の交互作用とした重回帰モデルを検討した。その結果、予測された自尊心×状況の交互作用効果は有意には至らなかったものの、パターンの方向は予測に一貫していた。そこで回答者を状況ごとに分割して分析を行ったところ、予測と一貫して、引越経験者は地元出身者よりも自尊心が幸福感に与える効果が強かった。一方、情緒的サポート×状況の交互作用効果は有意であった。そこで状況間の比較をしたところ、予測通り、情緒的サポートの規定力は、地元出身者の方が引越経験者よりも強かった。

④研究 1-4：中国における検討

自尊心、および情緒的サポートを独立変数とし、人生満足感を従属変数とした重回帰分析を行った。すると、単回帰分析では見られていた情緒的サポートの効果が消滅し、自尊心の効果のみが残った。これは、予測とは異なり、Kwan et al.(1997)で見られた米国人の結果と同じパターンであった。その原因を検討したところ、今回の中国人参加者は関係流動性認知が高く、また自尊心が高いなど、他の側面に関しても米国人と類似したパターンを示していることがわかった。このことが何を意味するのかは現時点では不明であり、今後の検討が待たれる。

以上、マルチ＝メソッドを用いた 4 つの研究により、自尊心が幸福感に与える影響は、社会状況の関係流動性によって干渉されるとの仮説に対して、全体として強い支持が得られた。

(2) 検討課題 2：自尊心の対人関係拡張機能

①研究 2-1：相関研究

まず参加者を、自尊心尺度への回答に基づき、高自尊心群と低自尊心群に二分した。この両群間で比較を行ったところ、予測に一貫して、3/4 のシナリオにおいて高自尊心群は低自尊心群よりも強い対人関係拡張傾向を示した（2 つのシナリオでは有意差、1 つのシナリオでは有意傾向の差が見られた。残りの 1 つでは有意差なし）。また 2/4 のシナリオで、高自尊心群は低自尊心群よりも、新規他者に対して多くの時間配分をすると答えた（残りの 2 つでは有意差なし）。さらに、一般的な対人関係拡張志向についても、低自尊心群よりも高自尊心の方が強かった。一方、対人関係維持傾向については、いずれのシナリオにおいても、また一般的な志向性についても、高低自尊心群間で有意差は見られなかった。

②研究 2-2：実験研究

まず自尊心操作の有効性を検討したところ、操作は弱く、高自尊心条件と低自尊心条件の間に、操作チェック項目である自尊心に有意差が示されなかった。そこで実験操作の課題で適切な内容を自由記述した参加者のみを抽出したところ、高自尊心条件の 24 名、および低自尊心条件の 23 名のみが残った。

これらの参加者に対して群間の比較を行うと、2/4 のシナリオにおいて、予測通り、低自尊心者よりも高自尊心者の方が初対面他者への時間配分が多かった（残りの 2 シナリオでは有意差なし）。また、一般的関係拡張志向を比較したところ、やはり予測通り、低自尊心群よりも高自尊心群の方が高かった。一方、一般的な対人関係維持志向については群間に差はなかった。

以上 2 つの研究の結果は、高自尊心者は低自尊心者よりも新規関係形成を求めるという、自尊心の対人関係ブースター仮説とおおむね一貫するものである。しかしながら、いずれの研究においてもその効果は必ずしも強いものではなく、また実験研究(2-2)では実験操作自体が弱かった。改善した方法を用いたさらなる追試が必要である。

(3) 検討課題 3：孤独感が幸福感の低下をもたらす過程に対する関係流動性の調整効果

①研究 3-1：準実験的検討

分析の結果、孤独感が人生満足感に与える影響に対する自尊心の媒介効果は、予測通り、入学直後の 1 年生においては有意であったが、2 年生では有意ではなかった。また、従属変数を将来の人生満足感の予測とした場合には、1 年生では自尊心による完全な媒介が見られたが、2 年生では部分媒介効果しか見られなかった。ただしこれらの媒介効果の差を有意性検定したところ、有意には至らなかった。よって今後、サンプルサイズを増大させるなどして、さらなる検討の余地が残る。

(4) 結語

以上の研究結果は、研究代表者のグループによる先行研究の結果と併せて、従来は「北米」や「東アジア」といった地理的な地域に特有の文化現象と考えられてきた自尊心の高さやその影響力の差異について、社会生態学的アプローチからの一般理論による説明が有効であることを示す強力な証拠である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 14 件）

①佐藤剛介・結城雅樹. (2010). 社会生態学的アプローチによる自尊心の効果の検討 - 社会状況間比較研究. 北海道心理学会第57回大会. 札幌国際大学.（10 月 10 日）

②Sato, K., & Yuki, M. (2010). *The "openness" of a society determines the relationship between self-esteem and subjective well-being: A cross-situational comparison with Quasi-Experimental Design*. Paper presented at the 11th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Las Vegas.（1 月 29～30 日）

③Sato, K., & Yuki, M. (2010). *The "openness" of a society determines the relationship between self-esteem and subjective well-being: A cross-situational comparison with Quasi-Experimental Design*. Paper presented at the 6th SPSP Cultural Psychology Pre-Conference, Las Vegas.（1 月 28 日）
④佐藤剛介・結城雅樹. (2009). 幸福感の源泉を左右する社会生態学的要因の検討－準実験手法を用いて－. 第 2 回日本人間行動進化学会年次大会. 福岡.（12 月 12・13 日）
⑤Sato, K., Yuki, M., Takemura, K., Schug, J., & Oishi, S. (2009). *Relational Mobility Determines the Impact of Self-Esteem on Subjective Wellbeing: A Socio-Ecological Approach*. Paper presented at the Culture and Sociality of Mind Symposium at 12th Soul National University and Hokkaido University Joint Conference, Seoul, Korea.（11 月 19 日～21 日）
⑥佐藤剛介・結城雅樹. (2009). 関係流動性が自尊心の効果に与える影響（3）－準実験手法による検討. 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ･ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会. 大阪大学（10 月 10～12 日）
⑦佐藤剛介・結城雅樹. (2009). 社会生態学的アプローチによる自尊心の関係拡張機能の検証. 日本心理学会第 73 回大会. 立命館大学.（8 月 26～28 日）
⑧Sato, K., Yuki, M., Takemura, K., Schug, J., & Oishi, S. (2009). *The "Openness" of a Society Determines the Impact of Self-Esteem on Subjective Well-Being: A Socio-Ecological Approach*. Paper presented at the 21st Annual Convention of the Association for Psychological Science, San Francisco.（5 月 27～30 日）
⑨Sato, K., & Yuki, M. (2009). *Self-esteem is a "relationship booster," particularly in societies high in relational mobility*. Paper presented at the 10th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Tampa, FL.（2 月 6 日）
⑩Sato, K., & Yuki, M. (2009). *Self-esteem is a "relationship booster," particularly in societies high in relational mobility*. Paper presented at the 5th SPSP Cultural Psychology Pre-Conference, Tampa, FL.（2 月 5 日）
⑪佐藤剛介・結城雅樹. (2008). 高自尊心者は幸せか？(2)－社会状況間比較－. 北海道心理学会第 55 回大会. 北星学園大学.（11 月 23 日）
⑫佐藤剛介・結城雅樹. (2008). 社会生態学的アプローチによる自尊心の関係拡張機能の検証. 日本社会心理学会第 49 回大会. 鹿児島.（11 月 2・3 日）
⑬Sato, K., Yuki, M., Takemura, K., Schug, J., & Oishi, S. (2008). *Differential impact of self-esteem on subjective well-being in open vs. closed societies*. Paper presented at the 19th International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology. Jacobs University, Bremen, Germany.（7 月 27～31 日）
⑭Takemura, K., & Yuki, M. (2008). *The 'evoked culture' approach to cultural variations in the importance of self-esteem (2): A secondary data analysis*. Paper presented at the 20th Annual Meeting of the Human Behavior and Evolution Society. Kyoto, Japan.（6 月 4～8 日）

６．研究組織

(1)研究代表者
結城　雅樹（YUKI MASAKI）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50301859

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし